

妻のこと

六十二歳

1957・8・25
全文

この本を編集して、目次を並べてみたとき、祖先のことは書いてあるのに、直接の父母のことがないのはおかしいと思つたので、あとから「父母のこと」を書き加えたが、すると今度は、父母のことがあつて、もっと直接な妻のことが何も書いてないのはおかしいという感じがした。息子や孫は、これから先が長いのだから、書いて書くにも及ばないが、私と同伴している妻のことに触れないのは、やつぱりおかしいのである。そこで、ごく簡単に書き加えることにした。

妻は村山隆子りゅうこといつて、今は三重県鳥羽市に編入された坂手てという島の米穀、酒、雑貨商（田舎によくある「よろず屋」である）の娘であつた。当時は坂手村といい、漁師ばかりの島で、隆子の父は雑貨商は人まかせで、村に一つの小学校の先生をしていたという。この父は早く歿ぼつして、私は会っていないが、そういう田舎にしては好学の人であつたようだ。母がすっかりもので、父の歿後、隆子の兄の年少のあいだは、一人で店を切りまわしていた。村山家は代々万右衛門まんえもんを名乗り、そういう商売をしている家は、ほかに一軒しかなか

初出・底本 わが夢と真実
／昭和三十二年八月 東
京創元社

つたので、まず村での資産家であつた。今は隆子の兄も半ば隠退して、その長男が店をやつている。

隆子は高等小学校は対岸の鳥羽町へ舟で通い、それから、坂手からは遠くにある亀山町の三重県立女子師範に入学し、下宿したり寄宿舎に入つたりして、そこを卒業し、卒業と同時に、自宅のある坂手村の小学校に奉職した。

私は大正六年の十一月ごろから、大正八年の正月まで、神戸鈴木商店の経営していた鳥羽の造船所に勤めたが、その大正七年のことだと思ふ。私は若い同僚たちと「鳥羽お伽会」というものを作り、鳥羽町の劇場や、付近の小学校などでお伽話の会をひらき、同僚たちといっしょに、演壇でお話をして喜んでいたものだが、あるとき、近くの坂手村小学校でもこの会を開くことになり、その交渉に出かけたとき、教員室ではじめて隆子に会つたのである。そして、お互いに認めあつたらしいのである。そのころの隆子は田舎にしてはととのつた理知的な顔をしていたし、笑顔もよかつた。進歩的な考えも持つているようにも見えた。それから文通がはじまり、まあラブレターのやり取りをしたものである。

しかし、私は恋愛と結婚とを別物に考えていた。まことに申し訳ないわけだが、私の性根は別項、「恋愛不能者」に告白しているとおりで、結婚を予想する恋愛ではなかつた。それゆえ、手紙は書いても、ほとんど会わなかつたし、接吻は

恋愛と結婚 貼雑年譜の

「村山隆ト結婚ス(二十六年)」の項には次のように記されている。

鳥羽在职時代私ハ彼女トタゞ文通ヲシタノミテ親シク話シ合ツタ事モナカツタガ、ソノ手紙ハムロン恋愛ノ手紙デアツタタメニ、真面目ナ彼女ハ急速ニ結婚ノコトヲ文中ニ記シハジメタ。私ハ独身主義者タツタノデ、コレハイケナイト思ヒ、直チニ私ノ考ヘヲ相手ニ知ラセ結婚スル意志ノナイコトヲ示シタガ、ソレニツイテ一度ヨク話シ合ハウトシテル内ニ、私ノ急ナ退職トナリ、ソノマ、上京シテシマッタ。手ヲ握ツタコトモナイ間柄ダシ、独身主義ヲ表明シタノダカラ、ソレテ事情ミト考ヘテ申テアル。併シ彼女ノ方ヲハ、狭い村ノコトデ、私ト文通ノコトナドモ多クノ人ニ知レ渡ツテ申タノデ、ソノ私ガ鳥羽ヲ去ツテシマ

もちろん、握手一つしたこともないのである。

ところが、私は鳥羽に一年余りいるうちに、料理屋などに片っぱしから借金を作り、とうとう居たたまらなくなつて、夜逃げをしてしまった（作家になつてから、その借金は返済した）。そして、東京へ出て、何のあてもなく放浪しているうちに、私の母方の祖母が死に、そのへソクリの二千元余りを私の弟と、私の甥が折半して分けてもらったので、私は兄弟三人で、千円のもつで、東京の団子坂通りに古本屋の店をひらくことにして、やつと窮況を脱した。

しかし、いくら物価のやすい時分でも（大学出の月給が四、五十円）千円で商売ができるものではない。そのうえに、鳥羽でのグレン隊仲間であつた旧友が、二人も会社を首になつて上京し、私たちの店へ同居することになり、その友達と商売そつちのので浅草歌劇の後援会などをやつたものだから店の本は売り喰いで、補充がつかず、棚にはだんだん隙間ができてくる。仕方がないので、隙間には本の外箱だけを並べてごまかすという惨状であつた。

そこで、商売は第二人にまかせて、私は「東京バック」の編集を引き受けたり、レコード・コンサートで儲けたり、ついに、深夜チャルメラを吹いて車を挽き廻る支那ソバ屋までやつたものである。

そのさなかに、鳥羽造船所の旧友から手紙が来た。村山隆

ツタノデ八大（ヘン具合ノ
悪イコトニナリ、悲観ノ
余リ病氣トナツタ。私ハ
鳥羽造船所ノ同僚ニ山久
君カラコノコトノ知ラセ
テ受ケタノデ、詳シイセ
トヲ訊ネテ見ルト、隆子
ハモウ永イ間病ンデ申テ、
今ハ鳥羽町ノ医師ノ家ニ
母親附添ヒテ出養生ニ来
テキルガ、危篤状態ダト
イフコトガワカリ、私ハ
コレハ結婚スル外ハナイ
ト決心シタ。ソコデ朝鮮
ノ父ノ承諾ヲ求め、結婚
スル旨ノ手紙ヲ彼女ニ出
シタノデアアル。併シ今コ
チラハ非常ニ苦シイ生活
ヲシテキルノデソノ時期
デナイカラ、婚礼ハモウ
少シ先ニ延ハスト云ツテ
ヤッタノダガ、ソレニ構
ハズ、彼女ノ方デハ床上
ゲラスマセルト直チニ、
兄村山恒吉氏同道テ、三
人書房ヘヤツテ来テシマ
ツタノデアアル。私ハカー
キ服一着シカナイ身ノ上
蒲団モ一組ヲ井上君ト分
ケテ使ツテキルトイフヒ
ドイ状態、ソコデ新婚生

子が病気をして死にかけているというのである。狭い村のこ
とだから、私としきりに文通していたことは、村中に知れわ
たつていた。隆子は私のラブレターによつて、結婚におちつ
くものと信じていた。その相手の私が夜逃げをして、音信を
たつてしまつたのだから、彼女にしては村に顔むけができな
い。つい気病^{きやま}みが嵩^{かさ}じて入院まですることになつたのである。
むろん私は隆子から逃げたのでなく、借金から逃げたのだ
し、その借金のために音信もたつたのだが、ラブレターが気
まぐれであつたことは、常識上は弁解の余地がない。たとえ
手さえ握つたことのない仲であつても、ラブレターはしばし
ば書いているのだから、無責任にはちがいない。

その隆子が瀕死の病氣ときいて、私は独身主義をなげうつ
決心をした。そして、求婚の手紙を出した。独身主義者がラ
ブレターを書いてはいけないということもないと思うが、常
識としては、やはりいけなかつたのである。私の独身主義は
結局そのころのデカダン思想から来たものだが、中学時代の
先生が（この人はたぶん恐妻家だつたのだろう）何かの講義
の中で「男子なすあらんとするものは、妻などめとらず、生
涯その仕事を妻とすべきである」と説いたのが、耳の底にこ
びりついてた。私はデカダンながらも、一方では、何かを
なそうという気持ちも持つていた。また、一方では、いつ自
殺したくなるかもわからないという心配もあつた。足手纏^{あしづな}い

活ヲハジメタワケテアル。
二階ノ六畳ニ、私達二人
ノ外、井上、野崎ノ二人
モ居ルノデアル。ソノ頃
ハ母ガ妹ノ玉子ヲソレテ
朝鮮カラ来テモタノデ、
階下ニ余地ハナク、井上
野崎両君ハ外ニ寢ル所ガ
ナカッタノデアル。隆子
ガ来テカラモ、私ハ数日
支那ソバ屋ヲツヅケタガ
ドウモ具合ガ悪イノデ、
ソレハ止シテ隆子ト相談
ノ上、隆子ハ暫ク国ニ帰
リ、私ガ何カノ方途ヲ見
出スマデ、ヤハリ先生ヲ
ツヅケテ、少シツ、デモ
勉学費トイフヤウナモノ
ヲ送ツテケレルヤウニト
リ極メタ。私モ無茶デア
ツタガ、隆子モ当時ハ口
マンチツクナ所ガアツタ
ノデ、コノ言葉ヲ喜ンデ
引受ケタワケテアル。サ
ウシテ国ニ歸ツタコトハ
帰ツタガ、再ビ学校ヘ復
職スルコトガ困難テ、ソ
ノマ、家ノ手伝ヒノ裁縫
ナドヲシナガラ、何トイ
フコトモナク三ヶ月ヲ
スゴシタ。

の妻子はほしくなかった。それともう一つは、私は多くの家庭の夫婦喧嘩を見ていた。夫婦というものは実に嫌悪すべき状態だと思ひこんでいた。手近なところで、それも独身主義の理由の一つになった。

そういう信念みたいなものを持っていることを隆子は知らなかった。というよりも、私が固い独身主義を前提としたラブレターを書かなかつたのがいけなかつたのである。隆子は恋愛遊戯などできない生真面目な娘であつた。それもとどき二人が会つて、話をしていれば、私の気持ちちがわかつたのであるが、会つて話をしたことは、ほとんどなく、ラブレターだけのつき合ひであつた。

しかし、私はいつわりのラブレターを書いたわけではない。愛していたことは間違いない。だから、私のために病氣をしているときいて、すまないと思つたし、身に余る光栄とさへ感じた、そして、私達は結婚したのである。

隆子が旅ができるようになって、兄につれられて上京し、団子坂の店へきたのは、折あしく支那ソバ屋をやつている最中であつた。着物といえぼポロのカーキ服ただ一着、ほかの着物や服は皆質入れし、蒲団まで質屋へ持つて行つて、借り蒲団をしている状態だつた。だから、隆子の持つて来た衣類なども、次々と質入れするという始末で、生真面目な彼女はまったく驚愕してしまつた。それでも里へ帰りはしなかつた。

なにかしら私の進歩的に見える思想に魅されていたからであろう。これぎりの男でないと信じていたからであろう。

しかし、結婚式は画家の伯父の家で、正式にやった。私は借り着の紋付で、挨拶とも演説ともつかぬことを喋つたものである。支那ソバ屋をやつても、単なるおちぶれとは考えず、何かしら昂然たるものを持つていたにはちがいないのである。

しかし、妻をめぐつて支那ソバ屋もつづけられないので、前に世話をしてもらつた就職先をしくじつていたので、敷居が高くてごぶさたになつていた同郷の政治家、川崎克先生のところへ、面をおしぬぐつて、再度の就職を頼みに行つたものである。すると川崎先生は別に叱りもせず、東京市社会局へ入れて下さつた。だが、私という男は、またしても、その社会局を、半年でしくじつてしまつたのである。悪事を働いたわけではない。ただ毎朝起きて、きちんきちんと勤めに出る根気がなかつたのである。毎朝同じ時間に起きて同じ出勤をくりかえすことが、私という男には耐えられなかつたのである。それからあとの職業転々も、理由はすべて、このなんでもないことであつた。小説家になつて、やつと朝起きなくともよくなり、毎日きまりきつた勤めをしなくてすむことになつたので、やつと助かつたのである。

簡単にといいながら、つい長くなつてしまつた。だが職業転々の一々に及んでいては際限がないので、これにとどめる

夜逃げ 貼雑年譜の「学園

ノ夢（鳥羽造船所退社二
関聯シテ）」の項には次
のように記されている。

私ガ生活ノタメニ職業ニ
ツクト、必ズ私ヲ悩マス
モノニ「学園ノ夢」トデ
モイフヤウナモノガアツ
タ。前ノ加藤洋行逃亡ノ
原因モ根本ニハコノ夢ガ
アツタ、ソレ故ニコソ東
京ニ出テ先ツ図書館ニ通
ツテモ見ルワケデアル。
今度ノ鳥羽退社ニモソレ
ガアツタ。「東京ニ出テ
勉強ガシタイ」ト申出タ
ノハ単ナル口実デハナカ
ッタノデアル。心ニモナ
イ職業ニツイテキルト
（職業トイフモノハ常ニ
私ニツツテハ心ニモナイ
ノデアル）「一体何ノタ
メニ生キテキルノカ」ト
イフ疑問ニ堪ヘラレナク
ナツテ来ルノデアル。人
生トイフモノヲ、心底マ
デツキツメテ考ヘナイデ
ハ申ラレナクナルノデア
ル、ソ「ノ」方法トシテ
ハ私ニハ文学ヲ通ジテノ

が、隆子はその転々に伴うあらゆる苦勞をなめたのである。質屋通いはもちろんのこと、あすの米がなくても、友達を何人も居候いどうろうに置いて威張っているような時期もあったし、またあるときは、わずかの期間ではあったが、妻と、まだ赤ん坊の子供だけを大阪の父の家にあずけ、私は東京に帰って下宿生活をしているというような、つらい思いもさせた。また、小説家になつてからも、自分の能力にあいそをつかし、できるならば廃業したいと、妻に下宿屋をやらせ、私は地方を放浪して廻っているようなこともあった。小さい下宿屋から、大きな下宿屋に移り、妻が下宿の主婦をつとめて、痩せ細っていた時期が四年以上もつづいたのである。

妻は明治三十年生まれ、二十七年生まれの私とは三つちがいである。結婚したのは大正八年だから、私は数え年二十七歳、妻は二十四歳のときであった。私達の一人息子が生まれたのは大正十年。だから、今は数え年三十七歳となり、今年小学校へ入る男児と、この四月で誕生の女兒との親である。五中、一高、東大の順コースを経て、現在は私の家のすぐ前の立教大学の助教授をやっている。かつて苦勞を重ねた私の妻も、今はまず安樂な身の上といつてもよいのである。

勉強シカナカツタ。即チ
學問ノ夢デアル。ソレハ
幾度試ミテモ体力、資力
共ニ乏シクテ、一度モ夢
ヲ果シタコトハナシノデ
アルガ、ソレユエニ、夢
ハイツマデモ、四十八才
ノ今日マデモ、夢トシテ
残ツテキルワケデアル。
コレハ或ハ、大学卒業当
時學問ノ方ヘ進ミタイト
イフ希望ヲ押殺ンテ世間
ニ出タノデ、ソレガ意識
下ノ幽霊トナツテ業ヲシ
ツゞケルノデモアラウカ。